

飛鳥 ASUKA KAWARABAN  
かわら版

2024年  
3月

早春号

第213号

発行所 株式会社 飛鳥 出版室  
発行人 永野 正将  
ADD: 〒780-0945 高知市本宮町65-6  
TEL: 088-850-0588  
MAIL: info@asuka-net.jp



春を運ぶ  
心地よい風が  
頬を撫でる

表紙写真撮影（高知県高知市鏡川河川敷より）：株式会社 飛鳥

もくじ

おのころじま奮染記 31	田島征彦	02
日本からの眺め③	氏原名美	03
新聞余話 ②③	大澤重人	04
わたしのとっておき・カメラ	小谷了一	05

孫育てで感じたこと	06
広告	07
さもないこと④	永野雅子 08
ちーくんの釣り日記	

# 沖繩の味染木奮闘記

ふんせんき

## 31.「なきむしせいとく」その2

田島 征彦

沖繩戦を生き残った人たちは、たくさんの手記を残しています。多くの悲しみや恐怖や怒りを読み、ぼくの心の中に積み重なっていました。

アメリカ軍のために、亜熱帯の美しい自然が焼き尽くされ、隠れるところのない赤土や石灰岩の荒々しい島の中を逃げ惑う10万人の人々、母親や子どもと老人たちです。休むことなく海上の艦船から打ち込まれる艦砲射撃の轟音、機関銃で次々と撃ち殺される人たち。その戦場で、自分がいるのだと想像するだけで、ぼくは立ち上がれないほど、疲れてしまいました。

2020年6月、何度目かの沖繩取材へ旅立ちました。到着した翌日、ホテルで朝食を取りながら読んでいた新聞に、読谷村のぼくと同年配の男性が、自分の戦争体験を描いた21枚の絵を公民館へ寄贈するという記

しました。それは、あまりにも強烈な出来事を見たからに違いありません。本土でぼくが経験した一日だけの空襲とは比べものになりません。

喜友名さんも、ぼくのように泣き虫で、戦が始まり住み慣れた家を捨てて逃

げるのが恐くて、柱にかじりついて泣いたと話してくれました。

絵本の主人公のぼくも柱にかじりついて、母や妹を困らせるところから始まりました。

泣き虫の幼児が戦場を逃げ回る、絵本は進んでいききました。母は艦砲の弾の

破片を腹に受け、血の海の中で息絶え妹とも離れて一人では何も出来ない頼りないぼくは戦場でうろたえ、弾を全身に受けて倒れました。アメリカ人の医師の手術で片手を失ったものの一命をとりとめてベッドに横たわ



事を見つけました。すぐに読谷村へ車を走らせ、喜友名昇さんを訪ねました。喜友名さんは自宅に絵を並べて見せてくれました。戦中のことを思い出しながら描いた絵は、素人なりに丁寧

にたくさんの場面を描かれてい

っています。

そんな内容でも、編集の西尾薫さんは厳しい戦争を描きながら幼い子どもの眼から、分かり易い文章と型染めで染め上がった絵は、残酷な場面を和らげてすばらしい効果が出ていると評価してくれました。

しかし、絵本の肝心な終わりの場面へ届くには、二つも三つも努力が必要です。

ほんとうにぼくの気持ちができるのか、絵本出版の予定日が迫っていました。



田島 征彦  
たじま ゆきひこ  
染色家・絵本作家

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖繩の子どもたちを主人公にした「やんばるの少年」の次には沖繩戦を題材に、子どもたちに、戦争のことを、平和の大切さを伝える絵本「なきむしせいとく」が二〇二三年度の講談社絵本賞を受賞した他、国際的な評価を受けました。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

## 日本からの眺め ③

キルギス、中央アジア、ユーラシア：

氏原名美

徒然なるままに

心にうつりゆくよしなしごとを：

### テレビと映画の

### 思い出あれこれ

小学一年生の時、我が家に白黒テレビがやってきた。どの局も自前の番組が少ない時代、アメリカの連続ドラマが次々放映された。大人たちから「アメリカ人は英語をしゃべる」と聞いていたのに、なぜか『ライフルマン』もその息子のマークもみんな日本語だ。頭の中に言語の切替えスイッチでもあるのだろうか？吹替というものを知らなかったから不思議でならなかった。代わりに声を出す人がいることがわかってからは、脳内言語処理の疑問は消え、毎回「来週」を心待ちにした。

\*\*\*

小学校高学年になると、一九三〇年代から五〇年代にかけての古い映画が観られる「名画劇場」にハマった。平日午後三時過ぎから九十分ばかり、視

聴率が期待できないせいかスポンサーもつかない。ワイドショーもテレビショッピングもないから、暇つぶしのようにとつくの昔にキー局で放映済みの映画を再放送していた。全部日本語吹替だったが、十分理解できたとはいえない。ただ、ブラウン管が映し出す「ことは違う世界」に夢中になった。大相撲中継を観にくる祖父に邪魔されるとき以外、鍵っ子の特権でチェンネルは独り占め。毎日学校がひけたら一目散に帰宅してテレビにかじりついたものだ。ハリウッド映画がほとんどだったが、フランスやイタリア、たまにイギリスの映画も観ることができた。アジアやソ連の映画はなかったように思う。

中学からは、映画は映画館で観るものとなった。お昼代わりのポップコーンを片手に、吹替ではない「生の」映画を観るのが中高時代の、月に一度の贅沢だった。土曜日の4時間授業が終わると、テアトル土電か土電ホールに駆け込んだ。封切りでなければ確料金は二三〇円、入れ替え制のない時代だったので、途中から入ってもよかったし、座り続けて二度観ることもできた。字幕は画面下の横書きではなく、右側に縦書きで示

されていた。映画館ではテレビと違ってソビエト映画も上映された。十九世紀ロシア文学原作のものや当局の後盾がある監督の作品など、文部省選やら推薦やら日本政府のお墨付き、というものがばかりで、ソ連の文化戦略のひとつだったわけだが、そうと気づいたのは大学生になってからだ。

\*\*\*

一九六〇年代、アメリカのホームドラマやデイズニー映画を観てアメリカを知っているような気になっていたが、アメリカの子どもたちは、日本のことなんて興味も湧かなかつただろう。私も、ソ連や中国の子どもたちはどんな暮らしをしていて、どんな遊びが流行っているのか、テレビ番組は何を観ているのかなど、想像することもなかった。情報は双方向から与えられなければ誤解や無理解、無知や無関心につながってしまう。

ソビエト時代の娯楽映画や子ども向けアニメなど、彼の地の定番になっていくものが今でも繰り返しテレビ放映されていて、私もキルギスでは何度も観た。しかし、同年輩の知人と映画談義は盛り上がらない。彼らは作品が封切られた時代と当時の自分を重ね合わせているのだ

が、共時体験がないこちらは第三者でしかない。同世代の日本人と、『サンダーバード』やアメリカン・ニューシネマを共に懐かしむようなわけにはいかないのだ。それでも、古いソビエト映画が描く悲喜交々とした庶民の日常には、子ども頃に眺めた親や祖父のそれと変わらぬものが見えてくる。殺伐とした世界情勢に煽られて侵略者の顔しか見えなくなるのとは大違いだ。

\*\*\*

六十年来の映画オタクは膝関節が故障してあまり出歩けない。ドラマも映画も動画配信サービス頼りとなった。配信サービスのキットズコーナーは、アメリカ、イギリス、ベルギー、中国、韓国、それにロシアの動画が選取り見取り。時折、下の孫と世代を越えた共時体験を楽しんでいる。

氏原 名美

うじはら・なみ

ピシケク国立大学東洋国際関係学部特任教授。越知町出身。北海道大学卒。



ピシケク市街からアラトー山脈を望む(写真:Saijo Y.)



## 特ダネの秘訣 伝授します



送った手紙は全てコピーして保存しています

私なりの、とっておきの特ダネの取り方を伝授します。なあんだ、そんなことかと、拍子抜けしても知りません。

新聞社の支局には毎日、20通くらい郵便物が届きます。取材依頼や文芸冊子、情報提供など。15年ほど前の高知在任中、郵便物を仕分けしていて、ひととき目を引く手紙がありました。書家が筆書きしたものです。

届け先の目に止まらせるには、効果あるなあ。そう気づいて、取材後の掲載紙を送る際に添える手紙を手書きに切り替えました。礼儀とか人として大切だから、ではなく、相手とより親しくなれるのではという打算からです（申し訳

ありません）。

下手くそな字ですが、お気に入りの万年筆で一字一字書き込んでいきます。ありきたりの言い回しではなく、取材時に気になったことや裏話などを盛り込みます。自分の

のことを印象づけるためにも、です。パソコン入力とは違って、時間も手間もかかります。使用済みの文言を使い回すこともできません。忙しいときには、本当に面倒です（内緒）。何度やめようと思つたことか。

しかしながら、じわじわと効果を挙げます。若い頃は取材が一度済めば、対象者とはほとんど交流がありませんでしたが、直筆の手紙を始めてから取材相手とより深い付き合いができるようになったのです。手紙だけでなく、定期的に訪ねるようになります。ネタ探しではなく、古いなじみと雑談をしに行く感じです。へえ、そんなことが。

雑談の中に、思わぬ金脈があるのです。ときには別の方を紹介される、その人とも交流を深める。そうなると、ネタは探しに行かなくても、向こうから歩いてきます。友人の受け売りですが、手紙を

手書きをしているときに費やしている時間は、相手のことを考えている時間になります。掛けただけの時間が相手との間を結んでくれるのです。

こうしたことがいかに大事か、記者生活が20年以上も経過して気づきました。おかげで高知は第二の故郷といえるぐらい、大切な人がたくさんでき、今も「お帰り」と出迎えてくれます。特ダネという小さなものではなく、もつと大きなものを得たのです。

ある大学の研究者がSNSのX（旧ツイッター）にこんな趣旨のことを書いていました。教授から「読んでおいたほうがいいよ」と勧められた本をすべて読んでいたら、いつの間にか研究者になっていた、と。こうも付け加えています。だが、ほとんどの人は、勧められた本を読まない、と。簡単で確実な方法があつても、とかく人間はやらないものです。

直筆の手紙を添える手法は、後輩たちにも伝えました。新人として着任した同僚の女性記者もその1人。大学の学部まで同じなので、特に熱く語つたつもりです。数年後。立場が変わり、後輩の取材を受ける機会がありました。

記事が無事に掲載され（感謝感謝です）、掲載紙が届きました。答え合わせの時間。どきどきしながら封筒を開きます。

掲載ページに2行ほどお礼を手書きした付箋が貼つてあるだけでした。先輩の指導が足りなかったようです。

★

この駄文を読んで、実行するメディア関係者が1人でもいたら連絡ください。もちろん手書きの手紙で。



大澤 重人

おおざわ・しげと

渡来人歴史館（天津市）  
専門員、元毎日新聞高知支局長

人との出会いによって高知時代に実を結んだのが『心に咲いた花―土佐からの手紙』（富山房インターナショナル）。

# わたしの とっておき・カメラ

小谷 了一



写真は小学校五年生のころから始めた。

昭和三十年のころ、まだ貧乏な時代に父はカメラ好きが高じ、二科展の入賞までしてしまった。その時のお祝いを兼ねて玩具のカメラを買ってくれた。玩具といえども、ピントと露出さえ合わせれば写る代物であった。

今でも覚えているが、小学六年で指人形、高校で体育祭、大学で小児のリハビリの写真を撮り厚生大臣賞を三回も頂いた。大学生の時の副賞がソニーのマイクロテレビで大喜びをしたことを今も記憶している。

写真好きの影響で医大卒業後も放射線科を選んでしまった。

そんなわけでカメラとはずいぶん長い付き合いになってしまった。しかし最近スマートフォンでの写真写りの良さに気づいた。なまじ一眼レフなどより、どれだけスマホカメラの色合い、ピント合わせが良くなっているかに驚かされる。夜景でも逆光でも、下手に一眼レフで写すよりきれいに写るのである。

一度船の上からカモメを写したことがあったが、ピントは飛んでいるカモメの眼にピチット合っていた。写真はピントが合うことが最低条件でありそれ以来、一眼レフを諦め、スマホだけの写真を撮りためている。

はじめはスマホを馬鹿にしていたが、素人にはとんでもなく使い勝手の良いカメラであると感じづいた。スマホの電話やメールの使用頻度は月に五回程度であり、購入時にはカメラ機能の良いスマホを選定理由の第一にしている。またスマホのカメラには一眼レフと同程度の機能が内蔵されており、それらを使いこなすことをお勧めする。ちなみに私のスマホは三年前に購入した韓国製のサムソンである。

当時は韓国製ということでも、随分と抵抗感があった。しかし写りの良さ、ピントと色合いとなると、日本製は敵わなかったのが残念である。



もうそろそろ買い替えの時期にきているが、写真の写りだけで比較すればまだ日本製は追いついていないような気がする。

次に写し方のこだわりを述べる。まず写したいと思うものを選ぶ。ここまでは当たり前の話であるが、写したいものの背景に何があるかを注意深く観察する。写したいもの一割、背景に九割くらいの配慮が必要である。

今のスマホカメラは目標に向けて、シャッターを押せば失敗なく写る仕組みに出来上がっているが、私のこだわりはカメラの機種ではなく、如何に希望通りの写真が撮れるかである。

白黒の

家族写真のうしろから

みんな笑えと父の声する

小谷 了一

おだに・りょういち

元医療法人小谷会理事  
医師



一枚の絵葉書

二〇二一年六月発行（飛鳥出版社）

「第五六回高知県出版文化賞」受賞

## 孫育てて感じたこと

# 孫と共に 過ごせる幸せ…

営業部 川田 道彦

2022年7月、私達夫婦にとって待望の初孫(男児)が誕生し、早1年と7ヶ月が経ちました。初孫を出産した長女夫婦は近くに住んでいるのですが共働きのため、二人が土日や祝日に勤務の日は私達が孫の世話をすることになっていきます。



今年の元旦は娘夫婦が仕事のため一日一緒に過ごしました。

私達夫婦も年齢的に体力が厳しくなってきたり不安もあります。二人で役割分担を決めるなどしながら力を合わせ何とか対応をしています。孫はこのところ随分と体重も増えており、抱っここの度に私の腰が悲鳴をあげ夜の湿布薬はかかせません。でも笑顔で「抱っこして〜」と言うように、両手を広げて飛び込んで来る姿にたまらない幸せを感じています。

私達自身の子育てはもう30年以上前になるので、昔と今の子育ての変化に随分戸惑いながら孫育てをしています。初めの頃は娘に過去の子育てを押し付けたりして、言い争いになることもありました。今は娘達の考え方を尊重しながらサポートをするように心がけています。

初めは寝ているだけだった孫が、寝返りを経てハイハイが出来るようになり、やっとよちよち歩きが出来るようになる、あつという間に走れるまでになりました。いつの間にかこんなことが出来るようになったのかと驚き感動することもよくあります。自分達が子育てをしていた時は、毎日毎日が精一杯で気がなかつたことも、今は祖父母として心にゆとりを持って見ていられることで、ふとしたことに気付けるんだなと思いつつ日々孫の成長を見守っています。

\* 私達が孫に思うのは、孫にとつて自分の親とは違う年齢や価値観の異なる祖父母と触れ合い、色々な価値観に興味を持ってくれることや、また日頃忙しい娘夫婦に代わり、心にゆとりをもって穏やかに孫と接する事で情緒や自尊心を育み、またコミュニケーション力などを身に付ける助けになればと

孫が帰ったあとは二人で夕ごはんを食べながら、その日の孫の様子を思い出しながら話をしたり、今度はこんなことをやってみようとか、あれを食べさせようとか、そんな何気ない会話をすることも私達夫婦の楽しみとなりました。そんな気持ちにさせてくれる孫の存在が有り難く、また娘夫婦にも感謝せずにはいられません。

成長していく孫との時間が、かけがえないものとして、私たちの楽しみであり、生きがいとなっています。



2月には保育園で節分用の鬼のお面を作りました。

# 私たち、株式会社飛鳥は SDGs (持続可能な開発目標) に 取り組んでいます。

実質再生可能なエネルギー100%の電力を確保し、  
環境への配慮を実施しています。



ホームページの **作成** **編集** **管理** が  
**誰でも 驚くほど簡単に!**



新時代のCMSが誕生しました!

# A-TOOL

エイツール

「A-TOOL」はみなさまの声から誕生した、オンラインのホームページ作成サービスです。インターネットにつながる環境ならば、いつでもどこでもホームページの画面上で作成や編集を行うことができ、HTMLやCSSといったホームページを作成するための知識も必要ありません。



**「A-TOOL」はお客様の声から誕生しました!**  
「ホームページを作成したことがない」「HTMLなどの知識なんてまったくない」そんな方でも簡単に楽しみながらホームページの作成ができる「えい(良い)ツール」です。



えい(良い)ツールあるよ!



イラスト制作: 田村

自分たちでホームページを作り込みたい!  
業者に依頼すると高い!

サイトにスピード感が必要!!

自社で簡単に更新したい!!

更新作業を特定の社員に頼りっぱなし

自社で簡単にネットショップを運用したい!

今すぐ商品を公開したい!

**「A-TOOL」の利用者が  
“ぞくぞく”と  
増えています!**



<https://a-tool.jp>

全て「A-TOOL」が解決します!! 詳しくは飛鳥まで!  
TEL: 088-850-0588 MAIL: info@asuka-net.jp

